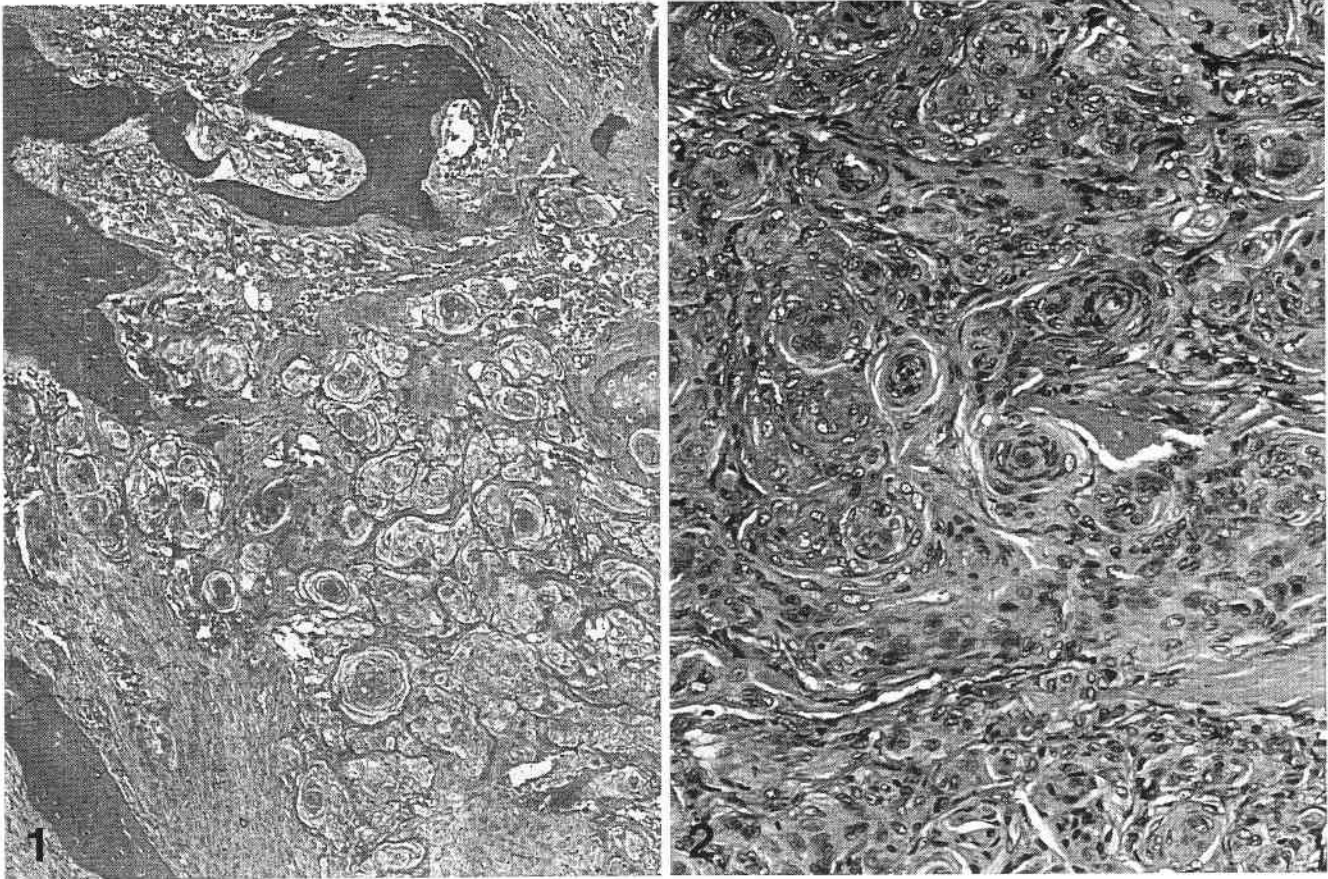


## イヌの眼窩内腫瘤

摂南大学薬学部薬物安全科学研究所出題 第41回獣医病理学研修会標本 No. 809



動物：犬，マルチーズ，雄，13歳

肉眼所見：肉眼的に腫瘤は眼球後部に存在し，剖面にて腫瘤内に巻き込まれた視神経が確認された。腫瘤の眼球内への浸潤は認められなかった。

組織所見：腫瘍組織内に巻き込まれた視神経と腫瘍組織との境界は明瞭で，視神経の外側にのみ腫瘍細胞が増殖していた。腫瘍組織は豊富な間質を有しており，増生した間質は骨化生，軟骨化生を伴っていた。また，腫瘍細胞を取り囲んで胞巣を形成していた（写真1）。腫瘍細胞の多くは細い間質に取り囲まれて胞巣状に配列していたが，胞巣をつくらずに増殖していることもあり，胞巣構造が不明瞭な部分では両者の細胞が移行している像も認められた。腫瘍細胞は類円形の比較的淡明な核を持ち，弱好酸性の豊富な細胞質を有する多型で大型な細胞から，小型の濃縮した核を持つ紡錘形の細胞まで，様々な形態を示していた。また，個々の腫瘍細胞の細胞境界は不明瞭であったが，多くの胞巣内には，腫瘍細胞の胞巣中心部に向かう渦巻き状構造，すなわち，whorl formation（渦巻構造）が認められた（写真

2，未脱灰標本）。

腫瘍細胞は免疫染色では，ビメンチン，NSEに陽性を示し，GFAP，8種類のケラチン，ニューロフィラメント，S-100蛋白には陰性であった。

診断および考察：腫瘍細胞が胞巣状あるいは胞巣をつくらずに増殖しwhorl formationも認められることから「髄膜腫」と診断した。本症例では間質の骨化生，軟骨化生が著しくヒトの脳腫瘍取り扱い規約では化生型髄膜腫に分類されると考えられた。WHOの動物腫瘍の分類には間質の骨化生，軟骨化生に関する記載は無いが，腫瘍細胞の形態から髄膜腫（髄膜皮型）に分類されると考えられた。犬の頭蓋内に発生した髄膜腫では，間質の骨化生，軟骨化生が著しい例は成書ではまれとされている。本症例のように犬の眼窩内に発生した髄膜腫で間質の骨化生，軟骨化生が認められた症例は複数報告されているが，眼窩内に発生した髄膜腫における間質の骨化生，軟骨化生の頻度に関する記載はなく，成書にも記載はなかった。